

## 第4章 中央ユーラシアの叙事詩に謡われる「ノガイ」について

坂井 弘紀

### はじめに

中央ユーラシアのテュルク系諸民族には、数多くの叙事詩<sup>1</sup>が伝えられてきた<sup>2</sup>。それらの叙事詩作品は、超自然的な描写や非現実的な表現などが見られることがあるものの、歴史事象を反映し、実在した歴史上の人物が描かれることが多かった<sup>3</sup>。しかも作品の主人公は、現存する様々な民族の「民族英雄」となりうる人物たちであり、現在の民族を考える上で決して無視できぬ存在の人々である。

文字が一般に使われなかった中央ユーラシアのテュルク系の人々、とりわけ遊牧民の歴史を知るには、これまで、文字をもった周辺民族の記述によらざるを得なかった。しかし、彼らの叙事詩・系譜などの口頭伝承には歴史上の人物や歴史的イベントが伝えられるが多く、彼らの視点による「歴史叙述」という点でも価値あるものといえるため、これらのある「民族」や集団の自己認識やアイデンティティ、歴史認識について知る手がかりにすることは十分に可能なのである。

「民族」を直接生み出すのが「想像」、アイデンティティ、記憶であるならば、「民族」の形成やその歴史を考える上で、集合的記憶である口頭伝承が果たす役割は大きいのだが、中央ユーラシアのテュルクに関しては、そのような観点からの研究はいまだ黎明の時期であり、十分な成果は得られていない<sup>4</sup>。

さて、15-16世紀のノガイ=オルダに関係した人物たちを謡った、ノガイ大系と呼ばれる一連の叙事詩がある<sup>5</sup>。これは中央ユーラシアの叙事詩作品の中で、質・量ともに大きな比重を占め、この地域の「民族形成」やその歴史を検討する上で大きな示唆を与えるものと考えられる。今回の報告では、口承叙事詩とくにノガイ大系を中心に、中央ユーラシア=テュルク系の人々が自分たちの「歴史」をどのように見ていたか、それらの作品が何を伝えてきたかを検討するとともに、現在の民族がそれらをどのように受容しているかといった点についても触れたいと思う。

### 「ノガイ大系」

ノガイ=オルダの統治者・有力者について謡った叙事詩群。ノガイ=オルダを中心にカザン、クリミア、エディル(ヴォルガ)川・ヤイク(ウラル)川流域をその舞台とし、14世紀末から17世紀前半のノガイ=オルダやカザン=ハン国、クリム=ハン国などの歴史時代について謡って

<sup>1</sup> jyr, dastan などを叙事詩と表す。また、ジャンルの伝説や昔話などと分類されるものでも、作品によっては便宜上「叙事詩」と表現する。

<sup>2</sup> それらの作品が採録されるようになったのは、19世紀中頃以降のことである。

<sup>3</sup> モチーフやテーマで多くの共通点をもつモンゴル系叙事詩では、歴史上の人物が描かれることは少なく、怪物や妖怪などと戦うことが多い。

<sup>4</sup> 宇山智彦「カザフ民族史再考：歴史記述の問題によせて」『地域研究論集』2(1)、1999年。

いる。カザフ、バシコルト、カザン=タタール、クリム=タタール、カラカルパク、ノガイなどといったキプチャク草原の諸民族に伝えられている。ノガイ大系はノガイ=オルダの創始者とされるエディゲと彼の子孫を描いた叙事詩が中心である。主な作品は「エディゲ」「ヌラディン」「ムサハン」「オラク・ママイ」「カラサイ・カズ」「チョラ=バトゥル」「エル=タルグン」「エル=コクシェ」など。

### ノガイ=オルダ

いわゆるキプチャク=ハン国(ジュチ=ウルス)の後継国家で、カザン=ハン国やアストラハン=ハン国、シビル=ハン国に強い政治的影響力をもっていた。14世紀末にエディゲ・ヌラディン親子によって興されたとされる。自称はマンガト。ヴォルガ河とウラル河流域とその周辺がその領域であった。ビーといわれる統治者を中心にムルザ(ミルザ)という有力者によって統治されていた。ムサとその息子たちが治めていた15世紀末から16世紀中頃までがその全盛期。16世紀中葉以降、ノガイ=オルダの内部では支配権を巡って争いが絶えず、大ノガイ、小ノガイなどに分裂し、弱体化していった。その後、一部はクルム=ハン国の保護下に入り、一部はカザフに同化するなどした。また北カフカスに居住するものもあったが、これは現在のノガイ人の先祖である。

## 1. 中央ユーラシア=テュルク叙事詩の特徴

中央ユーラシアの叙事詩には、歴史上重要な出来事が謡われていた。ケネサル=カスモフの反ロシア闘争や「イサタイとマハンベトの反乱」など19世紀の事件を題材にした作品が多く伝えられているほか、20世紀に入ってから、1916年の「中央アジア大反乱」や第二次世界大戦をテーマにした作品などがつくられた。

現在の「民族英雄」である、歴史上の人物を謡った作品の代表的作品として、カザフに伝わる叙事詩「アプライ=ハン」が挙げられる。アプライは、18世紀にカザフ草原を治めた人物で、「アクタバン=シュブルンドゥ(大いなる災難)」と呼ばれるモンゴル系ジュンガルの中央アジア侵攻の中、カザフの団結を呼びかけ、この危機を脱しようと努めたハンである。彼はカザフの英雄として叙事詩などの口頭伝承に語り伝えられてきた。叙事詩「アプライ=ハン」は、アプライの生涯のみならず、彼の系譜や彼を支えた部族構成、政権構造、周辺地域との交易の方法や物品等についても伝えており、史料としての性格を示している。

次に、「民族名称」としてカザフという言葉が現われる古い例として「アルカルク=バトゥル」が挙げられ

---

<sup>5</sup> nogay jyrlary, nogajskij cikl, Noghay epic complex と呼ばれるノガイ系の叙事詩群を「ノガイ大系」と表している。

<sup>6</sup> 中央ユーラシア=テュルクの叙事詩は、主にジュルシュやジュラウといった専門の語り手によって代々口承によって伝えられてきた。ときに数万行にも及ぶ膨大な量を語る者もいて、卓越した記憶力が要求された。また、コブズやドンブラといった弦楽器の演奏能力、即興の才能も必要とされていた。

る。この叙事詩は、アブライから少し遡った時代、カルマク<sup>7</sup>の中央アジア攻撃が本格化した時期を描いた、カザフに伝わる作品である。

カザフのハンが治めていた時代のこと、  
カザフの敵となったカルマクが略奪をしていた<sup>8</sup>。

と明確にカザフという言葉を使い、現在のカザフとほとんど同義の表現が見られる。このように、カザフの叙事詩は、18世紀には現代に通じる「カザフ」というアイデンティティが存在したことを示している。

また、バシュコルトにはプガチョフの乱に参加したサラウト＝ユラエフ（1754-1800）について謡った口頭伝承の作品も数多く残されている<sup>9</sup>。そこには「バシュコルト」という言葉が自己を表す名称として使われており、バシュコルトの「民族形成」を検討する上で、大きな示唆を与えている。この作品は、カザン＝タートルには伝えられているものの、その他の地域には、筆者が知る限り、伝えられていない。

さらに、カラカルパクには、「ダウレトヤルベク」という叙事詩があり、18世紀後半に実在した人物が謡われている<sup>10</sup>。この作品は、コングラトの人々とヒヴァ＝ハン国との戦いを描いている。この作品は、コングラトという場所、あるいは部族について描いた話であるため、カラカルパクという表現こそないものの、カラカルパクでは、彼らの歴史を伝える固有の作品として語り伝えられてきた。

このように、18世紀の人物を描いた叙事詩には、当時の社会についての具体的な情報を含むものがあり、そこには現在の「民族アイデンティティ」と共通する意識が反映されていることが見て取れる。

それでは、これより遡った時代を謡った叙事詩に、このような「民族アイデンティティ」と共通する意識を映した作品はあるだろうか。そのような、現在の民族に固有の「英雄」を謡った叙事詩は、筆者の知る限り存在しない。17世紀以前の歴史について具体的に謡った作品は、ノガイ大系に属するとされる作品がほとんどなのである。ノガイ大系には現在の民族名称が表れることはなく、ノガイの勇士が描かれ、その舞台もノガイ＝オルダの領域を中心とした地域である。叙事詩は、英雄叙事詩・恋愛叙事詩・歴史叙事詩などと分類されることがあるが<sup>11</sup>、このうち具体的な歴史を謡っているとされる歴史叙事詩は、古くても18世紀前半を描いており、それ以前の時代を謡う作品はないことも併せて考えるとたいへん興味深い。

では次に、18世紀以前の歴史を伝えるノガイ大系について具体的に見てみたい。

<sup>7</sup> モンゴル系民族オイラトの遊牧国家ジュンガルのこと。17世紀前半からカザフやノガイなどを攻撃しつつ、ジュンガル盆地付近からカスピ海北岸、ヴォルガ川流域に移っていった。こうしたカルマクの侵攻により、ノガイ＝オルダは弱体化し、事実上崩壊した。

<sup>8</sup> Batyrlar 'yry 2. Almaty. 1961. 213-b.

<sup>9</sup> Baw-ort xaly-i'ady 2. Øfo. 1997.

<sup>10</sup> D'letqrbek % d'stan. Nökis. 1995.

<sup>11</sup> Raxman ʻBerd' baj. Zpos mʻraty. Almaty. 1997.

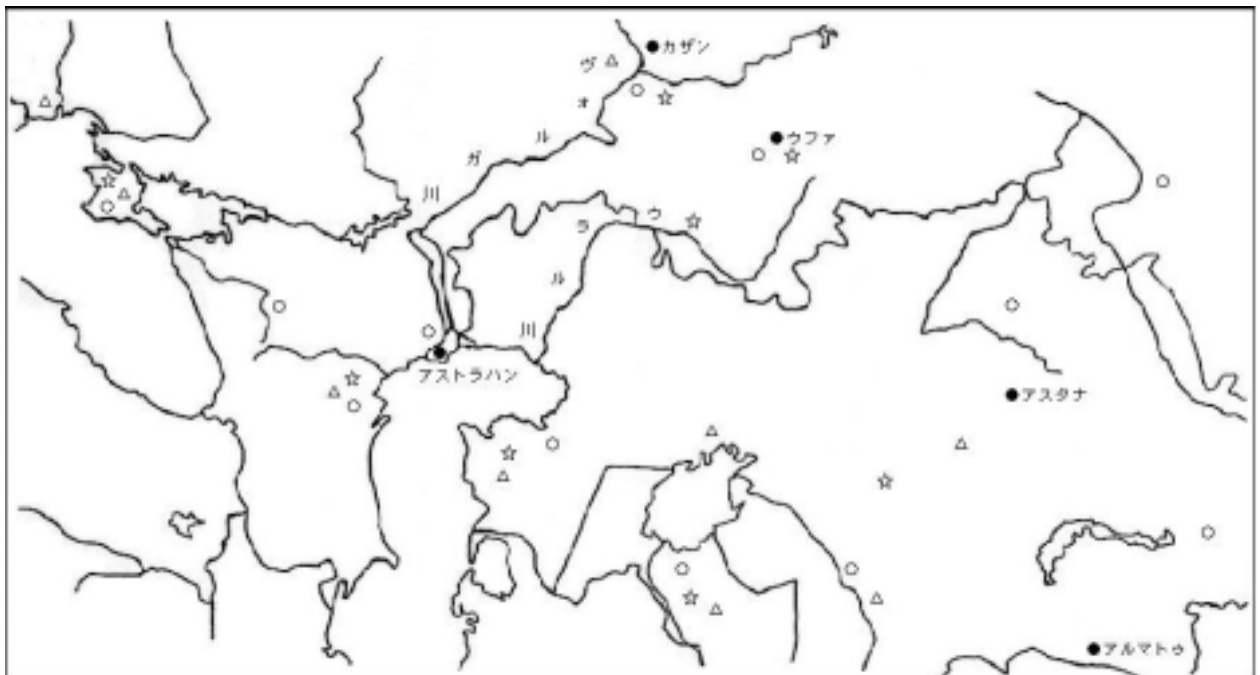
## 2. ノガイ大系について

ノガイ大系の作品は、どのヴァリエントもほぼ同様の登場人物や似通ったあらすじで、キプチャク草原を中心に広く伝えられ、この地域に住む人々に共有されている。

中央ユーラシア=テュルクの叙事詩では、「カザフ」や「カラカルパク」など現在の民族名がその舞台として叙事詩に現われることは少なく、コングラトやウァク、クプシャク(キプチャク)などの部族が舞台となるのが一般的である。しかし、ノガイ大系の舞台は「ノガイのくに<sup>12)</sup>」を中心とした、カザンやクリミア、エディル(ヴォルガ)川やヤイク(ウラル)川流域の広範な地域である<sup>13)</sup>。

著名な叙事詩研究者ジルムンスキーは「エディゲに関する物語は、テュルク系諸民族、すなわちカザフ、カラカルパク、ウズベク、ノガイ、カザン=タタール、クリム=タタール、シベリア=タタールに広く伝わっている<sup>14)</sup>」と述べているが、実際にこれらの作品がどの地域伝えられているかを作品の分布地図を例に見てみたい。

### 「ノガイ大系」主要作品分布図



... 「エディゲ」 ... 「オラク・ママイ」「カラサイ・カズ」 ... 「チョラ=バトゥル」  
(資料を基に筆者が作成)

分布地図が示すように、東は西シベリア・カザフ草原から西はクリミア半島、東欧まで、北はヴォルガ中

<sup>12)</sup> 叙事詩では *nočajly, nočajly Җıty, on san nočaj, to'san baully nočaj* などと表されている。

<sup>13)</sup> なお、いわゆる英雄叙事詩のみならず、恋愛叙事詩として分類される「コズ=コルベシュ」などノガイ大系以外の多くの作品も「ノガイのくに」を舞台としている。

流域から南はシル川流域までの広範な地域に伝えられてきたことがわかるが、この地域の地理的特徴として、遊牧による移動を遮る地理的障害がほとんどない放牧に適した草原地帯であることが挙げられる。

さて、ノガイ大系の主な作品として、「エディゲ」「ヌラディン」「ムサハン」「オラク・ママイ」「カラサイ・カズ」など、15-16世紀のノガイ=オルダの統治者・有力者を描いた作品<sup>15</sup>や「チョラ=バトゥル」、「エル=タルグン」など16-17世紀のノガイやその周辺の歴史を伝える作品などがある。

「エディゲ」には、エディゲ・ヌラディン親子がティムールとともにトクタミシュ<sup>16</sup>と戦うさまやヌラディンとトクタミシュの息子カディルベルディとの争いが描かれる。なお、ノガイ大系のエディゲ裔の作品には、ノガイ=オルダの統治者の系譜としての役割も果たしており、その信憑性についても認められるべきであろう<sup>17</sup>。また、エディゲ裔の作品、とくに「エディゲ」では、エディゲの系譜が彼の20代前の祖先アバクル<sup>18</sup>にまで遡って伝えられるなど、ノガイの統治者の「ムスリム」としての由緒正しき、イスラーム的な歴史の深さが強調されている。もっとも、7代前のババトゥクラス以前の系譜については、エディゲの孫ワッカスのころに「捏造」されたと考えるのが自然で<sup>19</sup>、このような系譜は、チンギス=ハンの血を引かぬエディゲ一族が、チンギス=ハンの血統に対抗すべく、イスラームの系統を利用したものであるという指摘がなされている<sup>20</sup>。

「エル=タルグン」は、主人公タルグンがノガイのくにやクリム=ハン国をさすらいながらカルマクと戦う様を描いており<sup>21</sup>、文献史料では確認できないものの、口頭伝承ではノガイ=オルダのムルザ、エステレクの息子として伝えられている<sup>22</sup>。また、「チョラ=バトゥル」の多くのヴァリエーションでは、チョラがクリミア=ハン国からカザンへ行き、ロシアと戦うというあらすじ<sup>23</sup>である。チョラはノガイ=オルダの人物ではないものの、カザン=ハン国の有力者であったと考えられ、16世紀のカザンを中心とした地域の出来事に深く関与する人物であった。

さて、数あるノガイ大系の中でも、エディゲ・ヌラディン親子を謡った作品、オラク・ママイ兄弟やカラサイ・カズ兄弟を謡った作品が多くを占めているため、これらの作品がノガイ大系の中心的作品と考えて差し支えないだろう。とくに「オラク・ママイ」「カラサイ・カズ」の二つの世代を描く作品は、キプチャク草原を中心に広く伝わり、またノガイ=オルダやそれを継承する様々な「民族」の歴史にとって重要な出来

<sup>14</sup> "irmunskij B.M. T[irskij geroiheskij /pos. Leningrad. 1974. str 393.

<sup>15</sup> カザフの著名な語り手ムレン=ジュラウは「エディゲ」「ヌラディン」「ムサハン」「オラク・ママイ」「カラサイ・カズ」といったエディゲとその子孫の叙事詩を残しているが、これらはそのままエディゲ裔の系譜でもある。

<sup>16</sup> いわゆる「キプチャク=ハン国」のハン。1376年以降キプチャク草原を支配した。エディゲとの戦いは1390年代に行われ、以後次第にその勢力は弱まっていった。

<sup>17</sup> 文字史料 Prodol'enie Drevnej Rossijskoj Viviliofiki. Hast; 7-11. SPb. 1791-1801. „dyrc'ali "alajyr. We' reler 'inačy. Almaty. 1997. などによる系譜とほぼ一致し、史料学的価値が認められる。

<sup>18</sup> アバクルは初代正統カリフで、ムハンマドの古くからの友人といわれる人物である。

<sup>19</sup> Istován Vásáry, Russian and Tatar Genealogical Sources on the Origin of the Iusupov Family, Harvard Ukrainian Studies, vol.19, Cambridge, 1995, 740. 744.

<sup>20</sup> DeWeese, Devin, Islamization and Native Religion in the Golden Horde, Pennsylvania: The Pennsylvania State University Press, 1994.

<sup>21</sup> 坂井弘紀「カザフの英雄叙事詩にひそむ歴史：『エル=タルグン』の歴史背景に関する一考察」『内陸アジア史研究』12号、1997年。

<sup>22</sup> Muxamed'an Tynywpaev. Velikie bedstviq. Alma-Ata. 1992. str. 79.

<sup>23</sup> 坂井弘紀「テュルク英雄叙事詩の地域的特徴 - 『チョラ=バトゥル』の分類をもとに-」『地域研究論集』3(2) 2000年。

事を描いているため、これらの作品はきわめて注目に値する。今回はこれらの作品を中心に検討していく。

### 3. 叙事詩「オラク・ママイ」と「カラサイ・カズ」

口頭伝承の作品において、オラクとママイはそれぞれ単独で謡われることは少なく、ひとつの作品において二人が主人公として描かれる。それらの作品に「オラク・ママイ」という題名が付されることが多いのはそのためである。このことは、カラサイやカズを描いた作品にも同様で、そこでもやはり二人が主人公として謡われるため「カラサイ・カズ」と二人の名前が作品の題名となることが多い。このため、本論でもこれらの作品を「オラク・ママイ」「カラサイ・カズ」と表すこととする<sup>24</sup>。さらに、「オラク・ママイ」では、オラクの息子カラサイとカズが、「カラサイ・カズ」では彼らの父オラクが描かれることが珍しくなく、これら二つの作品は連続性をもってつながっているため、今回これらの作品を一連の作品としてとらえて検討していくこととしたい。

あらずじ（別添の資料参照のこと）を見てみると、「オラク・ママイ」はイスマイルをはじめとするノガイ内部の争いを、「カラサイ・カズ」はカルマクやクズルバシュ<sup>25</sup>といったノガイの外敵との戦いを描いているとすることができるであろう。このことは、この一連の作品が叙事詩の二大テーマである「内部の団結」と「外敵との戦い」にまさに合致していることを示している。

さらに、描かれる事件が起こった時期について見てみると、その時代はノガイ＝オルダの歴史においても、またキプチャク草原の人々にとっても重要な時期であったことがわかる。

まず、「オラク・ママイ」では、狡猾なイスマイルの策略によってオラクが殺害され、ノガイに内部抗争が本格化したことが描かれる。実際に、1550年代、親ロシア派のイスマイルで、クリム側につく他の有力者たちとの間に確執が生じていた。叙事詩のようにイスマイルがオラクを奸計をもって殺害したか否かは、口頭伝承以外の史料では確認されていない。しかし、「イスマイルのオラク殺し」を謡った口碑は各地に数多く伝わり、またオラクが死去したのは1550年頃と考えられていることから、イスマイルの策略は史実であったと考えるに足りよう。イスマイルは、対立していた親クリミアのユスフを殺害することにより、ノガイにおける勢力をさらに強めていった。ユスフやオラク、シャーママイ、カズなど、多くの有力者と鋭く対立していたイスマイルが、口頭伝承においては総じて、ネガティブに描かれていることは興味深い。

なお、叙事詩に描かれる「オラク」は、イスマイルに殺害されたユスフの渾名とし、この二人を同一人物とみなす見解<sup>26</sup>があるが、ロシアの外交史料などからもオラクの存在は確かなようであり<sup>27</sup>、今後さらなる検討が必要である。

<sup>24</sup> カラサイとカズを描いた「アディル＝スルタン」「アディル＝ソルタン」という題名の作品もあるが、ここではこれらも含め「カラサイ・カズ」に統一する。

<sup>25</sup> 16世紀にイランに興ったサファビー朝を支えた、シーア派を信仰するテュルク系騎馬軍事集団。「キシリバシ」ともいわれる。なお、「クズルバシュ（赤い頭）」は彼らがかぶっていた、シーア派を象徴する赤い帽子に由来する。

<sup>26</sup> Xalel Dosmǰamedǰly. Almaty. 1991. 111-b.

<sup>27</sup> ウラクの名は1535年の文書に最初に現れる。Prodol'enie Drevnej Rossijskoj Vivliofiki 7. SPb.1791. str.260.

次に「カラサイ・カズ」に描かれる外敵との争いも、ノガイにとって重要な出来事であった。

カラサイらが救うアディルは、クリムのハン、デヴレト＝ギレイの息子、アディル＝ギレイのことである。実際に、「カズ＝オルダ」といわれる小ノガイは1569年のアストラハン攻撃に、アディル＝ギレイの司令の下参加するなど、密接な関係にあった。オスマン帝国は1578-1606年にかけてサファビー朝(クズルバシュ)との戦争を行う上で、クリム＝ハン国の助力の必要が高まり、アディル＝ギレイもサファビー朝との戦いに参加するが、彼らに捕らえられる<sup>28</sup>。この捕虜となったアディルを救い出したのは、カズ一族が統率する「カズ＝オルダ」であり、作品にはその様子が描かれているのである。あるヴァARIANT<sup>29</sup>では、アディルを救出したカズが、アディルをハンの位に就かせ、カラサイはアディルの妹を妻としているが、実際16世紀後半、小ノガイはさらにクリム＝ハン国との関係を強化し、やがてこれに同化していったのであった。

さて、「カラサイ・カズ」にはクズルバシュではなくカルマクと戦うヴァARIANTがある。1630年代のカルマクの侵攻が、ノガイ＝オルダの崩壊を決定づけ、北カフカース移住の大きな契機となったように、カルマクとの戦いはノガイの運命を左右するものであった。正確にはカズの治世にノガイとカルマクが争ったという史実はない。しかし、かつて筆者が「チョラ＝バトゥル」を用いて明らかにしたように<sup>30</sup>、テュルク叙事詩では、どのような歴史的イベントの記憶がより重要であったという「歴史観」によって敵民族やエピソードが変わる例がしばしば見られることから、後世の人々にとって、カルマクの侵攻がクズルバシュとの戦いよりも重要であったため、カルマクがクズルバシュに取って代わって、伝えられてきたものと考えられる。

このように「オラク・ママイ」「カラサイ・カズ」は、ノガイ＝オルダの分裂・弱体化した時代を謡っており、ノガイ大系の多くの作品の冒頭部分に謡われる「ノガイ＝オルダが分裂したとき」というフレーズと合致している。

#### 4. ノガイとその周辺地域・「民族」

「エディゲ」や「オラク・ママイ」「カラサイ・カズ」などではノガイ＝オルダと周辺地域との関係が、「チョラ＝バトゥル」ではカザン＝ハン国の状況が、また「エル＝タルグン」ではノガイやクリミア＝ハン国がそれぞれ描かれている。ここではノガイ大系に描かれる国々、あるいはそれらが伝わる地域や「民族」についてノガイ＝オルダとの関わりを中心に見てみよう。

##### カザン＝ハン国

16世紀前半、ノガイ＝オルダはカザン＝ハン国において強い発言力をもつようになり、その内政に積極的に介入してきた。たとえば、カザンに接した地域(ヤイク川・カマ川流域)を遊牧していたノガイ＝オルダのムルザ、ユスフは、1533年、娘スユンビケを当時のカザン＝ハンであったジャン＝アリ(ヤナレイ)に嫁

<sup>28</sup> Akdes Nimet Kurat, Türkiye ve Idil boyu, Ankara, 1966, s.165.; Türk Kültürünü Araştırma Enstitüsü, Türk Dünyası El Kitabı, 1976, s. 946.

<sup>29</sup> マンベテフの語りをサツタロフが書き取ったヴァARIANT。語り手はカザフ人であると思われるが、居住地がカラカルパクスタン、コングラト市であることから、カラカルパク人である可能性もある。

<sup>30</sup> 坂井弘紀, 2000年。

がせ、カザンのハンたちと姻戚関係をもつにいたった<sup>31</sup>。当時、カザン=ハン国にはモスクワ派とクリム派の二つの派閥があったが、クリム派のカザン人は、まさにこのユスフの教唆によってジャンアリを殺したのあった<sup>32</sup>。その後、カザンに、それまでモスクワ派によって追放されていたクリムのハン、サファ=ギレイが舞い戻り、スコンビケは今度は彼の妻となった。こうしてユスフは、カザンの玉座を通じて、クリム=ハン国とも血縁関係を構築したのである。

1546年、内紛の結果、再びサファギレイがカザンを追放され、シャー=アリが玉座につくと、サファ=ギレイは自分の家族とともに義父ユスフのもと、すなわちノガイに見を寄せた。クリムの有力者はカザンのハンに返り咲くため、ノガイの協力を必要としていたのであった<sup>33</sup>。このように、ノガイはカザンで大きな役割を果たしていたのである。

1552年に、ロシアがカザンを占領して以降も、一部のノガイの人々は勢力を保ち続けた。一例を挙げると、ノガイのユスフとウルスの子孫は、1800年ころに、それぞれユスポフ家、ウルソフ家といわれるロシアの貴族階級となった<sup>34</sup>。ちなみに、ユスポフ家は19世紀末に断絶したが、ウルソフ家の子孫は存命であるという<sup>35</sup>。

#### クリム=ハン国

クリム=ハン国は、モンゴルによって建てられたキプチャク=ハン国の継承国家である。その歴史は、15世紀前半、ハジ=ギレイがバフチェサライを首都として、黒海北岸のクリミア地方に建てたことにはじまる。1475年にはオスマン帝国の保護下に入り、キプチャク草原で隆盛を誇り、この地域の歴史において少なからぬ役割を果たしたが、18世紀以降、黒海進出をもくろんで、オスマン帝国と対立するロシアの攻撃を受けるようになり、1783年にはロシアに併合された。

ノガイ=オルダはクリム=ハン国と深い関係があった。シャー=ママイやユスフはクリム出身のカザン=ハン、サファ=ギレイに娘を嫁がせるなど、クリム側の有力者との関係強化に努めた。

さらに、16世紀後半以降ノガイ=オルダがロシア派とクリム派に大きく二分されてからは、「カラサイ・カズ」に謡われるカズが統率したノガイの勢力「カズ=オルダ」がクリム勢力ととくに緊密な関係にあった。

クリミアには多くのノガイ人が移住したが、とくにクリミア半島北部には多くのノガイが住んでいた。彼らは16世紀後半以降、クリミア半島を中心とするクリム=ハン国領内に移住した人々の子孫であった。彼らはクリミア移住後も、ノガイ=オルダを謡った作品を代々語り伝えてきた。19世紀末にラドロフがクリミアで採録したノガイ大系の作品<sup>36</sup>は、まさに彼らが伝えてきたものにほかならない。さらに、クリミア戦争以降、ノガイの人々はクリミアからその宗主国であったオスマン帝国領内へと移住した。現在、東欧・ドブルジャ地方に住むタタール系住民の中にはノガイ系の人々があり、彼らからもノガイ大系の作品が採録さ

<sup>31</sup> Rıza'tdin F'xret'din. Kazan xannarı. Kazan. 1995. 114 b.

<sup>32</sup> Kohekaev B.-A. B. Nogajsko-russkie otnoweniq v 15-18vv.. Alma-Ata. 1988. str. 75.

<sup>33</sup> Tam'e.

<sup>34</sup> Istován Vásáry, 1995, 732-3.

<sup>35</sup> ibid., 733.

<sup>36</sup> Radloff, W. Proben der Volksliteratur der nördlichen türkischen Stämme. St. Peterburg. 1896.



れている。

### カザフ

カザフとノガイ=オルダはもともと、生活様式や言語・文化の面において類似していたが、16世紀中頃のカザフ=ハン、ハクナザルの攻撃を皮切りに、ノガイ=オルダの一部は漸次カザフ、とりわけ小ジュズに同化していった<sup>37</sup>。小ジュズの別名アルシュンという名称はクリム=タタール、カザン=タタール、バシュコルト、ノガイなどにも見られ、興味深い<sup>38</sup>。

さて、カザフ詩の豊かな伝統の礎を築いたのはアサン=カイグやドスパンベトやシャルキイズなどとされているが、これらの詩人はノガイ=オルダの詩人なのである<sup>39</sup>。先に、カザフの叙事詩の中心はノガイ大系であると述べたが、カザフの詩人の伝統もまた、ノガイ=オルダに発している。そして現在では、カザフの人々はノガイの詩人たちを「カザフの詩人」とみなしているのである。

カザフの叙事詩に、カザフという名称ではなくノガイという名称が現れることからわかるように、カザフ人は自分たちの歴史の一部がノガイであると認識していた<sup>40</sup>。しかし、19世紀には「ノガイ」という言葉は、叙事詩に現れる「ノガイ」の意味とは異なり、タタール(主としてヴォルガ=タタール)を表すことが一般的であった<sup>41</sup>。19世紀には「ノガイ時代」や「ノガイのくに」の「ノガイ」とタタールを意味する「ノガイ」との二つの異なる用法が併存したのである。なお、叙事詩においても、たとえば19世紀の「ケネサルの乱」を謡った叙事詩には「ノガイ」がヴォルガ=タタールを指す言葉として表れる<sup>42</sup>。

### バシュコルト

ノガイ大系が謡う時代、すなわち15-16世紀のバシュコルトにたいするノガイの政治的影響力はたいへん強く、16世紀後半には、現在のバシュコルトスタンの領域の多くがノガイ=オルダ(大ノガイ)の支配下にあった。ノガイの人々の一部は、16世紀中ごろからバシュコルトスタン南部の遊牧民と混合し、バシュコルトの「民族形成」に関わり、16世紀末にはバシュコルトに同化していた<sup>43</sup>。一説には、バシュコルトの「民族形成」は15世紀末から16世紀前半にかけて行われたといわれるが<sup>44</sup>、その真偽はともかくノガイがバシュコルトの「民族形成」に大きな影響を与えたことは確かである。

バシュコルトは「ノガイ」や「タタール」と呼ばれることが多かったために、そのころの彼らの詳細については不明である。しかしながら、バシュコルトの口頭伝承には、ノガイ=オルダの統治者の系譜が自分たちの系譜として伝えられている<sup>45</sup>。また、「バシュコルトの東南部のウセルガン部族はカザフ人と緊密に交

<sup>37</sup> Istoriq Kazaxstana 2. Almaty. 1997.str.154.

<sup>38</sup> ,aza° we° res°. Celinograd. 1991. 31-32b.(M°xamed'an Tynywbaj°ly. ,aza° xaly°yny° tarixyna °atysty materialdar. Tawkent. 1925.)

<sup>39</sup> %ouelbek ,o°vratbaev ,aza° 'debiat°n° tarixy. Almaty. 1994. 26b.

<sup>40</sup> "immunskij B.M. T°rkskij gerioheskij /pos. Leningrad. 1974. str 515. M°xstar %ouezov. Wy°armalar 'ina°y 17. 188-b.

<sup>41</sup> V.V. Bartol;d. Sohineniq 5. Moskva. 1968. str.212.

<sup>42</sup> 坂井弘紀「英雄叙事詩が伝える「ケネサルの反乱」」『イスラム世界』44号、1994年。

<sup>43</sup> Kuzeev R.G. Proisxo'denie bawkirkского naroda. Moskva. 1974. str.482-487.

<sup>44</sup> Tam°e. str. 506.

<sup>45</sup> Baw-ort xaly-°ady 2. Øfö. 1997. 173-söb.

わって暮らしてきた。そのウセルガン族からはアルグシャイ=バトゥルとスラ=バトゥル(チョラ=バトゥル)が輩出された。」という伝承がある<sup>46</sup>。これらのことからバシュコルトにはノガイ大系に謡われる人物を自らの先祖と考える人々がいたことやカザフと密接した関係を維持していたことがわかるのである。実際、バシュコルトはカザン=タタールやカザフと文化・歴史的に共通する点が多く、とくに南部に伝わる口頭伝承には、カザフと共通する特徴が見られる。

### カラカルパク

カラカルパクの「民族形成」については諸説あるが、彼らの「民族形成」にまつわる口碑や叙事詩は、やはりノガイに関する歴史を描いた一連の作品がもっとも著しい存在であり、カラカルパクはノガイから派生したと伝える作品もある。

ノガイであった人々は故郷を離れて、  
僅かな希望を抱ながら暮らしていた。  
10のノガイのくにが分裂したとき、  
あるものはさすらいながら過ごしていた/  
かの者はノガイをカラカルパクと呼び  
「離れしもの」として一生を過ごした<sup>47</sup>。

こうしたことは、カラカルパクがノガイ=オルダを長く構成しており、カラカルパクがかつてノガイとともにアラル海沿岸やヴォルガ川、ウラル川、クリミア地方にまで遊牧をしていたことの反映であるとの指摘がある<sup>48</sup>。カラカルパク民族史学では、カラカルパクという名称自体は9世紀から存在するものの、「ノガイの6人の息子」と呼ばれるムサの息子たちの支配したくにがカラカルパクの基幹をなしたとされている<sup>49</sup>。カラカルパクの口碑の多くが「ノガイのくにで」と始まるのはこのためであり、16世紀後半の「ノガイの6人の息子のくに」の分裂によって、自らをかつての「民族名称」に従い、カラカルパクと呼び始めたという<sup>50</sup>。カラカルパクがかつてノガイであったことは疑いの余地がないとの指摘もあり<sup>51</sup>、カラカルパクがノガイから分裂したということは十分に考えうる。

### ロシア

ノガイ大系にはロシアとの戦いをテーマにした叙事詩が少なからずあるため、その対立が強調されることが多い。たとえば、「チョラ=バトゥル」では、クリム=ハン国やカザン=ハン国のために主人公チョラがロシ

<sup>46</sup> Wunda u-.174-se bit.

<sup>47</sup> オテシィ=アルシュンバイ・ウル(1828-1902)の作品。%odebiqt xrestomatiqsy. Nökis. 1998.94-b.

<sup>48</sup> Kamal M'mbetov. ,ara°alpa°dy√/tnografiqly° tarijxy,. Nökis. 1995.15bet.

<sup>49</sup> sonda, 12bet.

<sup>50</sup> sonda, 7, 12-13betler.

<sup>51</sup> Howorth H.H., History of Mongols. Part 2. Division 2., London, 1880, 105.

アと戦い、戦死する様子が描かれていたり、「オラク・ママイ」や「カラサイとカズ」でオラクを卑怯な手法で殺害する「内部の敵」たるイスマイルが完全なロシア派の人物であったりと、ロシアは敵対勢力として否定的に謡われている。それに対して、「カラサイとカズ」は、クリムの皇子アディル＝スルタンを救出し、アディルはノガイのハンとなるということを謡っており、「クリムに対する讃歌」ともいえるような内容である。

このようにノガイ大系は「反ロシア・親クリミア」的性格が強いように感じられるが、チョラがロシア史料では親ロシア派の人物であったり、「オラク・ママイ」では、オラクやママイの兄弟にロシア娘の血を引く息子がいたり<sup>52</sup>、必ずしも対立の面だけではない、複雑な関係も反映されていることに注意が必要であろう。実際、ノガイはロシアの重要な東方貿易相手のひとつであったり、イスマイルのようにロシアとの関係を重視する勢力があったりした。ノガイ大系の作品に謡われる事件が起こっていた時代には、ロシア対イスラーム世界といった単純な対立だけではなく、内訌も含めた様々な争いや対立軸があったことを忘れるべきではないだろう<sup>53</sup>。そして、ロシアとの対立構図は、むしろ時代を下って一層強調されるようになったと考えるべきである。

## 5. 現代国家とノガイ大系との関わり

現代の中央アジア諸国において、「民族文化」たる叙事詩は、国家統合の象徴として、「ナショナリズム」高揚の役割を担っている感がある。クルグズスタンでは、叙事詩「マナス」の数多くのテキストや関連書籍が出版されたり、1995年には「マナス 1000 年記念祭」が開催されたりするなど、「民族英雄」に祭り上げられている。「マナス」は、類似したモチーフや登場人物などが他の民族に伝わる叙事詩にも見られるものの、もっぱらクルグズに伝わる作品と認知されており、その意味ではクルグズに固有の「民族文化」として「国家統合」の象徴に転化されやすいといえよう。

ウズベキスタンでは、1998年に「アルパミシュ千年記念祭」が開催され、一連の関連行事が行われ、多くの書籍が刊行された。「アルパミシュ」系の作品は、アルタイからトルコまでの広範なテュルク世界に伝えられており、「マナス」の例とは対照的である。しかしながら、数多くの様々なヴァリエントがウズベキスタンで採集されていることやその舞台が現在のウズベキスタンにあると一般に考えられていることなどで、その「正当性」が主張されているようである。

一方、ノガイ大系の作品についてはどうであろうか。ノガイ大系は、キプチャク草原を中心に中央ユーラシアの広範な地域に伝えられ、共有する民族が多く、その「正当性」をどの民族も主張することが可能である。裏返せば、どの民族もノガイ大系を自民族に固有の「民族文化」とは訴えがたい。また、これらの民族の多くは、クルグズスタンやウズベキスタンのような「独立国家」を持たず、「マナス」のような「国威発

<sup>52</sup> ヌルトガンの語りによるヴァリエント。

<sup>53</sup> 同じ作品であっても、作品が伝えられる過程で、その後の歴史状況により、反ロシア的要素が強められた地域と逆に失われていった地域とがある。坂井、2000。

揚」の象徴としての「民族英雄」を叙事詩に見出す必要性に欠けている。さらに、これら民族が居住する国家(ロシア連邦構成共和国、ウズベキスタン構成共和国)は、独立国家であるカザフスタンも含めて、とくに複雑な民族構成であるという背景もある。現在の国民や民族としての意識を強化させる観点からは、ノガイ大系が「民族文化」や「民族英雄」として再発見・再創造される可能性は高きはなさそうである。

近年タタルスタンの首都カザンで「エディゲ」のテキストが幾度となく出版されていたりするものの、総じてノガイ大系の出版・研究は少ない。これは「アルパミシュ」や「マナス」とは対照的に、国家のてこ入れが少なく、財政的に困窮した状況にあることも関係しているだろう。

## まとめ

キプチャク草原に住む、中央ユーラシアのテュルク諸民族にはそれぞれ、史上実在した「民族英雄」について謡った叙事詩が伝えられている。それらはカザフのアブライやケネサル、バシコルトのサラワトなどであるが、このような作品は当該の「民族」以外には基本的に伝えられていない、その「民族」に固有の作品である。18世紀以前に遡った時代を舞台とした作品にこうした特徴をもつものはほとんど見られない。また、18世紀以前について伝える口頭伝承を見る限り、現在あるような民族名称が表れることは、ほとんどない。

17世紀以前を舞台にした作品であるノガイ大系に謡われる歴史上の人物は、ノガイ＝オルダの有力者で、現在のいずれかの民族に特定される勇士たちではない。ノガイの勇士たちが活躍していた時代にも、たとえばカザフにはジャニベクやケレイ、ハクナザルなどが、またクリミア＝タタールにはメングリ＝ギレイやデヴレト＝ギレイなどの英雄的人物がいたにも関わらず、彼らについて謡った作品は、筆者の知る限り、これらの地域に伝え残されてはいない。これまで、もっぱらノガイの勇士たちが彼らの「英雄」としてみなされ、語り伝えられてきたのである。

ノガイ大系には、ノガイ＝オルダを中心としたおよそ二世紀におよぶ歴史が描かれ、とくにその主要作品は、その歴史における重要な出来事を伝えている。ノガイ大系の多くの作品の冒頭で、

10のノガイが分裂したとき、  
オルマンベト<sup>54</sup>が亡くなったとき

と謡われるように、ノガイ＝オルダの分裂はこの地域における転換期のひとつと見なされており、実際、現在の民族の形成とその強化にとってこの時期は画期的な時期であったといえるであろう。

現在、ノガイ大系が伝わる民族は、これらの作品がノガイ＝オルダの歴史を謡い、様々な民族に伝えられていることを認識しつつも、それぞれがそれらを自分たち自身の作品として捉えている。このことはノガイ大系の作品が彼らの「民族文化」として完全に根付いていること、そしてノガイ＝オルダの歴史が彼らの歴史の一部として代々伝えられてきたことを示している。

また、キプチャク草原には、英雄叙事詩であるノガイ大系のほかにも、「コズ＝コルベシュ」などの恋愛をテーマにした叙事詩、スプラ、アサン＝カイグ、シャルゲズなどの実在したあるいは実在したと考えられる詩人（ジュラウ）の作品など、ノガイについて謡った作品が数多く伝えられており、詩を中心とする口承文芸における共通の伝統が存在していた。中央ユーラシアには、しばしば言われる「中央アジアの一体性」や「イスラーム共同体」といった枠組みとは別に、口承文芸などの精神文化に見られるような、共通の文化圏もまた存在したことに注目すべきであろう。

---

<sup>54</sup> オルマンベトは、16世紀末のノガイ＝オルダの一部「オルマンベト＝ノガイ」の統治者。

## ノガイ大系の主な作品のあらすじ

### 「エディゲ」(カラカルバク版)

クブルという所にババ=トゥクリ=アジズという人が住んでいた。ペリ(妖精)たちは毎年ここにある泉に沐浴に来ていた。ババ=トゥクリ=アジズは、彼等の衣服を盗んで、誰かひとりが彼に嫁ぐならば、衣服は返すといった。天女たちはこれに同意して、一人が彼の元に嫁いだ。しかし、ババ=トゥクリ=アジズはなかなか約束を守らなかった。天女はババに「私のおなかには6ヶ月のあなたの子供がいます。この子をいつかどこかの木の根本で見つけて下さい」といって飛んでいった。

この子供をトゥマン=ホジャという人の下女が見つけた。そして子供の名前をトクタミシュ=ハンにつけてもらいに行くと、「奇跡の子供はハンのもとにいるべきだ」とその子をハンが奪い取ってしまい、その名をエディゲとつけた。エディゲは成長し、ハンの馬を世話する仕事をしていたが、トクタミシュの妻たちと仲違いしたため、大臣たちの言葉を聞かずに、サテミル(ティムール)のくにへ逃げていく。サテミルはエディゲを快く迎え入れた。エディゲは敵と戦い、アクビレクという娘を妻にする。

一方、トクタミシュのくににいるエディゲの妻からはヌラディンという息子がうまれた。トクタミシュは大臣の言葉に従い、ヌラディンを殺す計画を立てる。そしてヌラディンにかなたにいるソツパスル=スプラというジュラウを連れてこさせるという苦難を与えた。だが、ヌラディンは無難にスプラをハンの宮殿に連れてくる。そのため、ヌラディンを恐れたトクタミシュは、宴の場で彼を殺そうとする。しかし、ヌラディンはアングスンとトゥングスンというエディゲの友人の助けによって殺されずにすんだ。

彼は、サテミルの国へ父エディゲを頼って逃げる。サテミルはエディゲとヌラディンとを会わせ、彼らにトクタミシュと戦うよう頼んだ。そして、ヌラディンはトクタミシュを殺した。

その後、エディゲとヌラディンは仲違いしてしまう。呪いにより、ヌラディンの鞭の縄が切れて、エディゲの右目に当たってしまった。自分を恥じたヌラディンは父のところに行くことができず、やがて別の土地へ行くが、ケンジェバイという大臣がエディゲとヌラディンとを仲直りさせる。そして、「体の一部が足りなければ、ハンにはなれない」という言い伝えにしたがって、エディゲは玉座をヌラディンに譲ったのであった。

Edige (Ma<sup>o</sup>setov , , ara<sup>o</sup>alpa<sup>o</sup> xal<sup>o</sup>yny<sup>o</sup> / k<sup>o</sup>rkem a<sup>o</sup>zyeki d<sup>o</sup>ret<sup>o</sup>pleri. N<sup>o</sup>kis. 1996.)

### 「ウラクとママイ」(カザン=タタール版)

昔、ウラクとママイという兄弟がいた。彼らにはカロレクという母がいた。

ママイには子供がなかった。ウラクには二人の子供がいた。一人は8歳で、もう一人は7歳であった。

当時、10のノガイはウラクの支配下にあった。ある日、ウラクが死んだ。彼が死んだことを聞いて、カルマクのハンが使いをよこした。「ママイはもう老いた。ウラクの子供はまだ若い。それ故、人々を私に従わせ、税を払え。もしもこれに従わねば、ママイよ、アラタウに戦いに来い」と言った。

ママイは10のノガイを呼び集め、彼らに尋ねた。

「どうすべきだろうか。税を払うべきか、それとも戦うべきか。」

ノガイの民たちは言った。

「われらは戦いません。戦えば、みな滅んでしまいしょう。」

そして、民は税を払うことに同意し、戦いには行かなかった。しかし、ママイは使いの鼻と耳を切り取り、ハンのもとへ追い返した。

「ここから去って、ハンに伝える。わしは貢ぎ物を贈らん。アラタウへ戦いに来いと。」

そしてママイは自分の馬に乗って、戦いに向かった。戦場には、500人ものカルマク兵が来ていた。彼らはママイを取り囲んだ。ママイは彼らと戦い、500人のカルマク兵のうち250人を倒した。残りは逃げ去った。そして、カルマクのハンのもとに帰り着いた。

彼らが逃げると、ママイは下馬し、鞍を置いて、弓をつるし、横になって眠った。長いこと眠っていた。そのため、カルマク人たちが近くに迫っていることに気がつかなかった。カルマクたちはさらに500人の兵でやってきたのだった。彼らはまず、ママイの馬を盗んだ。脇腹の弓も盗んだ。ママイだけが知らずにいた。そして、ママイはカルマクの声に目覚めた。目覚めてみると、カルマクが取り囲んでいた。戦うにも武器がなかった。石で戦おうとしたがそれも空しく終わった。彼らはママイを捕まえて、首に縄を結びつけた。長柄(かじ棒)に結び付けられてしまった。そして、ある村につれていかれた。その村の入り口は石で閉ざされていた。

ちょうどそのころ、ママイの母カロレクは夢を見た。夢ではママイの両目が、無くなっていた。ウラクの息子の一人を呼んで、こう言った。

「ああ、嫌な夢を見た。おまえの父さんの両目が無くなっていた。父さんはカルマクの捕虜になっているに違いない。どうすればいいの？おまえはまだ若すぎるし」と。

だがウラクの息子は、「私は行きます！」と言った。そこで老婆は、「行きなさい。おまえに駿馬がある。サンドック(長持ち)に鎧があるから、身につけなさい。それから鞍があるからそれを馬につけなさい。」と言った。

馬に鞍をつけ、敵に向かっていった。勇士はママイのいる村の傍に来た。村の入り口の石を投げた。長い縄をそこに投げ入れて、ママイを外に出して、救出した。

その後、勇士はカルマクの町へ行った。カルマクの町についた。カルマク=ハンは誰かが来るのを見た。それはウラクの息子であった。ハンはそこから逃げ出した。

ウラクの息子は、町に入った。カルマク=ハンの娘は、彼の前に来て、彼に食事を与えた。食事を終えると、ウラクの息子はハンのあとを追いかけた。彼が来るのを見て、覚悟を決めたカルマク=ハンは馬の向きを変えた。ハンは「一騎打ちの順番を決めよう」と言った。

勇士はハンに攻撃権を与えた。カルマク=ハンは矢を射た。矢は勇士の「9層の鎧」の7層目にまで達した。勇士は言った。「次は俺の番だ」と。

勇士の番になった。勇士はカルマク=ハンに矢を射た。矢はカルマクを射ぬき、ハンは倒れた。勇士はハンの馬に乗って、ハンの娘のもとに行った。娘は自分の父が死んだことを知った。そのため、「あなたの妻に

なります」と言った。

再度、勇士に食事を与えた。食事を取っていると、再び500人のカルマクがやってきた。娘は出ていけず、泣いた。「彼らはあなたを殺すわ」と言って。

彼は、その言葉にも関わらず、馬に乗ってカルマクたちと戦い始めた。勇士は、この500人のカルマク人を倒した。そして、カルマクの国を自分の手中に収めた。多くの家畜と金銀を手に入れた。多くの民を従えて、帰宅した。帰郷すると、10のノガイの人々もやってきて、迎え入れた。祝宴が行われた。そしてこの勇士を町にハンとして戴いた。彼は誠実なハンであった。その生活はたいへんすばらしいものとなった。

Urak bel'n Mamaj (Tatar xalyk I...aty % dastannar: Kazan. 1984.)

### 「カラサイとカズ」(カザフ版)

勇士ママイとオラクはムサの息子であった。ババ=トゥクティ=シャシュティ=アジズが彼らの祖先であった。彼らは、エディゲやヌラディンの時代からくにの守り手であった。エディルとジャユクの二つの川に挟まれた広大な地が彼らの国であった。

オラクはすぐれた勇士で、この地上で行ったことのない土地はないほどであった。しかし3つの心残りがあった。

一つは、ママイには跡を継ぐ子供がいないため笑うことを忘れてしまったこと、二つめはウラル山でエル=コクシェが育てたクズル号をカラサイのものにさせられなかったこと、三つめは、キガシュという高い山に行き、そこを服従させることができず、デルベントという町を攻撃できなかったことであった。これらの悔いを残して、オラクは死んだ。

やがて、成長した彼の息子カラサイとカズがこれらの悔いを果たそうと考えた。カラサイは、まずコクシェのクズル号を得ようとした。コクシェはカラサイの妹キバトと引き換えなら、馬を与えようといった。しかし年老いたコクシェに嫁ぐことを、キバトは潔しとしない。カズはカラサイに、妹を売ってまで馬に乗るならば、歩いていたほうがましだといい、それに同意したカラサイは歩いて行くことにした。それを見たキバトはコクシェのもとにいき、馬をカラサイにあげるように言った。

ある日ママイ=ビーは敵と戦っていたが、これを倒すことができずにいた。彼を補う息子がいなかったためである。しかしそのとき、一方からクズル号に乗ったカラサイがやってきて、敵と槍での一騎打ちの末、敵を打ち破った。

だが、カラサイの援助にママイは気づかずに勝利したと思っていた。そこでカラサイはママイのもとに行き、自分がママイの息子として、助太刀したことを告げる。これを知って、生涯、笑ったことのなかったママイはカラサイの顔を見ながら笑ったのであった。カラサイはママイの息子代わりになったのである。

こうしてカラサイは父の残した後悔のうち二つを果たした。カラサイは残ったひとつの遺志をどう果たそうと考えた。そのころキガシュ山にはクズルバスという強敵がいて、そこに行くものはみな殺された。クルムの若いハン、アディルは軍隊を召集し、このクズルバスと戦うためにキガシュ山に向かおうとしていた。4万の兵力でも破れないほど敵は強力だった。アディルのもとに、数多くの著名な勇士が集結し、出陣した。



カラサイもまた彼に同行しようとクルムに向かった。

クズルバスとの戦いは、六日にわたった。その中でカラサイは負傷してしまった。カズは傷ついた兄をクズルバスのくんに残すことはできないと、ともに帰還することとした。一方、アディルは穴に落ちて、身動きが取れずにいた。クズルバスは暗い穴の中のアディルを発見し、穴に入っていった。アディルは刀を振りまわして、応戦したが捕らえられ、両手を結ばれて連行された。これまでノガイのどんな勇士も来たことのない遠い場所に彼はひとり残された。

クルムに残ったバイピケシュは、出陣してから何年も経つアディルがなかなか戻らないことを案じた。アディルは敵に捕らえられていたのだが、何が起きたのか知る由もなかった。カズは「デルベントのクズルバスを打ち砕いて、友を救い出しに行こう」と言い、カラサイとともに「オラク！」とウラン（鬨の声）を叫び、デルベントへと向かった。しかし、アディルをなかなか探し出せない。するとそこへ彼らの母がピル（守護聖人）となって飛んできて、アディルの居場所を示してくれた。彼は地下牢にいたのだった。

再会を果たした3人は抱き合って喜んだ。アディルを駿馬クズル号に乗せて、ピルたちの助力を得ながら、クズルバスを打ち負かせた。そして3人は無事に帰り着いた。若いアディルを玉座につかせ、ハンに戴かせた。アディルは妹イリヤをカラサイに娶らせた。オラクの二人の息子は、こうしてママイの3つの遺志を果たしたのであった。

,arasaj-,azy (aza<sup>o</sup>ty<sup>v</sup>batyrlı<sup>o</sup>/posy. Almaty. 1992.)

### 「カラサイとカズ=バトゥル」(バシュコルト版)

その昔、ノガイにウラクというバトゥルがいた。その勇敢さや聡明さのためにイスマギル=ミルザ(イスマイル=ミルザ)は彼を非常に妬んだ。ウラクをどうしても殺したいと思った。

ウラクは矢でも槍でも殺すことはできないほど強かった。イスマギルは、ウラクは彼のもつ刀でのみ、彼を殺すことができると知った。そこで勇士を雇い、ウラクが寝ているときにその刀を盗ませ、彼のユルタ(天幕)の入り口に結びつけた上で、外から彼を大声で呼ぶように命じた。雇われた勇士たちは盗んだ刀をユルタの入り口に高く結び付けておいた。そして、「泥棒だ!起きろ」と叫んだ。

騒がしさに目を覚ましたウラクはユルタから外に出ようと飛び出し、仕掛けられていた自分の刀で傷つき死んでしまった。

こうして、イスマギル=ミルザは宿敵ウラクを消し去り、ハンとなった。だが、ウラクには二人の幼い息子がいた。上の子はカラサイ、下の子はカズといった。婆やはこの孤児となった子供たちを、非情なイスマギルから殺されぬよう、別々の方角に逃がし、生き延ばせようとした。彼らはたいへんな苦勞をしてどうにか成長した。

あるとき、ノガイとカルマクが敵対するようになった。そうした中、カラサイ兄弟はイスマギルを殺し、本懐を遂げた。

やがて、カラサイはカルマクを撃退しようとするようになった。しかし、彼には馬も武器もなかった。彼は、婆やに馬と武器を見つけて渡すように頼んだ。乳母はカラサイがまだ幼いと思い、はじめはこれに同

意しなかった。馬や武器は見つからず、敵はすでに遠くに行ってしまったと言って、ごまかした。

あるとき、ガゼルソルタン(アディル=スルタン)というバトゥルが、ノガイの40人のバトゥルを集めて、カルマクと戦おうとした。しかし、ガゼルソルタンは敗北し、カルマクに囚われ、投獄された。その牢屋は誰も立ち入らない高い山にあった。

ガゼルソルタンが敗れ、彼が囚われたことを聞いて、老婆は、カラサイを「スルタンの駿馬」に乗せて、敵に立ち向かわせた。勇士はカルマクを撃ち破った。ただガゼルソルタンを見つけることはできなかった。

牢屋にいたガゼルソルタンは、一匹の燕の翼に手紙をつけて飛ばせた。そこには「私を探し出して、救えるのはウラクの息子カズだけだ」と書き記してあった。

カズは探索に出発した。彼はその高い山に行き、洞窟を見つけた。カルマクを兄カラサイとともに倒して、ガゼルソルタンを救出し、たくさんの家畜や戦利品をもって帰郷した。こうして、カラサイとカズは勇士としての名声を周囲に広めたのであった。

ちなみに、現バシコルトスタン共和国ウルンボル州ベリャエフ地区のブランス村のそばにカラサイ湖という湖がある。かつてカラサイがこの湖の湖畔で夏営していたために、そう呼ばれるようになったという。

—arasaj men' n —aQy batyr (Baw-ort xaly- i'ady 2. Øfö. 1997.)